

中山尾根

平成 30 年 4 月 3 日

メンバー：岩川（L）、草田（記）

赤岳鉱泉と行者小屋を切り裂くように雄々しく横たわる尾根。それが中山尾根と知ったのは昨年秋だ。行きつけのクライミングジムで仲良くなった元会員の人が、ここは面白いと勧めてくれたのがきっかけである。それから 12 月・2 月・3 月と計画してきたが、互いの諸事情や天候不順が重なり、流れてしまっていた。しかし 4 月になり、ようやく今季最後のチャンスをものにすることができた。想像以上に気持ちの良いルートだった。

深夜に浜松を出て、赤岳山荘へと向かう。岩川さんは道中、赤岳山荘への林道が凍っていないか、荒れていないかと心配していたが、私は 2 月末に松野さんの車がすんなり入れたので、駆動輪の違いこそあるものの同じような車であったし大丈夫だろうと見込んでいた。結果は、岩川さんの予想の方が近かった。林道にはほぼ雪はなかったのだが、そのせいで荒れた路面がむき出しになり、デコボコが際立っていた。岩川さんはそんな路面の轍に上手に乗りながら、歩くのと同じくらいかそれより遅いスピードで上っていく。赤岳山荘へ着いた頃にはもう 2 時を回っていた。私たちは早急に仮眠をとった。

翌朝起きると、私のヘルメットがないことに気が付く。待ち合わせ場所に忘れたのだ。ヘルメットがなければ、勿論この山行は敗退だ。岩川さんが敗退しようといったが、赤岳鉱泉にアイスクライミング用のヘルメットを貸出ししていたのを思い出し、一縷の望みにかけて電話をしてみる。すると案外すんなり借りられるということが分かった。とりあえず一安心。岩川さんの時間とお金と労力を奪わなくてよかった。ちょっと遠回りにはなるが、鉱泉経由で中山乗越を目指すことになった。外はもう明るかった。

赤岳鉱泉でヘルメットを借りる。どれがいいかと聞かれたので、どれでもよいと答えた。岩川さんが持っているベツルのヘルメットの最新型を勧めてくれた。しかも 500 円。安い。トイレへ行き、十分に腹ごしらえをし、ハーネスとアイゼンを履く。赤岳へ登りに行くという 15 名程度の中国人の団体を見送り、自分たちも中山乗越へと向かった。

案外あっさり着いた中山乗越から、中山尾根を詰めていく。トレースはばっちり。樹林帯なので、日差しも遮られて歩きやすい。ゆっくりと歩くこと小一時間。樹林帯が切れる頃、岩壁が現れた。右手には赤岳・中岳・阿弥陀岳が見える。壮大な尾根だ。胸が高鳴る。しかし 2 月の大同心南稜のような武者震いは起きなかった。ひとまず小休憩を取った後、1 ピッチ目へ挑んだ。



写真中央・下部岩壁と写真奥・上部岩壁

1P目は岩川さんが挑む。まだ陽の差さない下部岩壁。確保中は風が吹くと少し肌寒い。岩川さんはそんな日陰の脆い岩壁を、確実に丁寧に登っていく。そうして私が陽に照らさるようになった頃、確保解除の声が聞こえた。いよいよ私の番だ。前回よりも冷静に挑む。脆い岩質に苦戦しつつも、1Pを終えた。登り応えがあった。

2P目。私がリードする。最初はスラブを行こうかと考えたが、アイゼンを掛けられそうにもないので、左の草付を目指す。しかし、そこへ行くにしても左へトラバースしながらスラブを少し登らなければならない。難しい。使えるホールドは限られているのだから、覚悟を決めて進めばいいのに、よりスタティックに、より安全にいける方法はないかと考えて、ウロウロする。それでもなんとかスラブを抜け、草付に出た。岩川さんは私が迷ったところをあっさりと乗り越えていった。

雪稜はロープをしまうのが面倒なのでそのまま互いにコンテで進み、上部岩壁へ取付く。核心部。少し右へ回り込み、右のフェイスを岩川さんは登っていく。確保点からはよく見えないが、難しいのだろう。さっきまでよりも慎重に進んでいる。そうして自分の番。序盤から難しいが、それでも岩川さんのルートを丁寧に辿っていく。こんなもんか。難しいが、恐怖感を抱くほどではない。核心部というほど難しくはないな――。



左・ダブルロープにも慣れてきた様子 右・上部岩壁 1 ピッチ目

しかし、岩川さんの姿が見えたその瞬間、安堵と焦燥を感じた。ハングしている。ここを登るのか……。ひとまず自分を落ち着かせて、壁へと挑む。よく見ると足場はアイゼンの跡があるので分かる。分かるが、前爪 2 本に自分の体重をかけるのが怖い。ステミングを駆使しながら、丁寧にゆっくりと一手一手登っていく。素直に怖い。セカンドだから落ちることはないのだが、怖い。それでも意地だけでなんとか上へと登りきることができた。改めて岩川さんの技術の高さを思い知った。



核心の小ハング

その後雪稜、簡単な岩壁、稜線へのトラバースを経て、一般ルートへと戻った。赤岳・中岳・阿弥陀岳の三座は、黄砂の影響か霞んで見える。天気も良かったのに残念だ。私たちはズボズボと落とし穴にはまりながら、地藏尾根、赤岳鉱泉を経て赤岳山荘へと戻った。



忘れたヘルメットは、待ち合わせ場所の看板の裏に目立たぬように置いてあった。